2024 年 8 月 30 日

2024 年度海外認定研修　報告書
－ALA・米国図書館研修－

立命館大学　学術情報部　図書館利用支援課
田井中　美優

＜目次＞

I.　はじめに
II.　研修概要
III. 研修目的・課題
IV. 研修先・スケジュール
V.　研修報告
VI. 謝辞
VII. 参考文献・資料

I.　はじめに

本研修は、丸善雄松堂株式会社が図書館総合展運営委員会との共催で、図書館支援サービス事業の一環として、2013 年から海外の図書館や関係機関を訪問するフィールドワーク型研修を実施されている。

例年 6 月に実施される ALA（アメリカ図書館協会）年次総会が、今年はカリフォルニア州サンディエゴのコンベンション・センターにおいて、6 月 27 日から 7 月 2 日まで開催されることにあわせて、2019 年以来 5 年ぶりに海外図書館研修が実施されることとなった。今回の研修では、サンフランシスコ近郊の大学図書館や近隣の公共図書館へも視察、見学を行った。

II.　研修概要

ツアー参加者は大学図書館 1 名、公共図書館 1 名、大学教員 1 名、一般参加者 2 名、丸善雄松堂社員 5 名（うち 1 名は大学図書館の委託先で業務）による総勢 10 名の構成であった。研修の概要は以下の通りである。

項目	概要
研修名称	ALA 米国図書館研修 2024
研修日程	2024 年 6 月 26 日（水）～7 月 2 日（火）
企画協力	図書館総合展運営委員会、丸善雄松堂株式会社
旅行計画・実施	株式会社アイ・ダヴリュー・エイ・ツアー
訪問先	サンフランシスコ・サンディエゴ

III. 研修目的・課題

以下 4 点を研修の目的、課題として掲げ本研修に参加した。

（1）利用者に対するサービス向上のために、米国の図書館スタッフの教育や研修内容、他機関連携等の図書館運営に関する事例を調査する。

（2）図書館利用者とのコミュニケーションを志向する新たな ICT 技術の導入を検討するべく、米国の図書館での先行事例を調査する。

（3）本学図書館でのサービスにおける今後の取り組みの参考として、米国の図書館での企画や展示などのイベント事例や、どのように発案から準備を行っているのか等を調査する。

（4）世界の図書館の動向をいち早くキャッチし、 絶えず図書館サービスの向上のために推進するためにも、研修参加者や訪問先の図書館関係者との人的ネットワークを構築する。

IV. 研修先・スケジュール

日時	研修先
6 月 26 日（水）	（1）サンフランシスコ公共図書館
6 月 27 日（木）	（2）スタンフォード大学図書館（中央図書館、東アジア図書館）
	（3）アザートン公共図書館
6 月 28 日（金）	（4）カリフォルニア大学バークレー校（ドー図書館、モリソン図書館、モフィット図書館、中央書庫、C・V・スター東アジア図書館）
	（5）サウサリート公共図書館
6 月 30 日（日）	（6）ALA 年次総会および ALA 年次総会特別セッション

（1）サンフランシスコ公共図書館

項目	概要
設立	1879 年（現在のシビックセンターには 1996 年に移設）
所蔵点数	200 万以上
概要・特徴など	・サンフランシスコ歴史センター、ブックアート＆スペシャルコレクション、LGBTQIA センター、行政情報センター等の個性的なコレクションの保有。 ・図書館の公式ロゴが「ノーティラス（ラテン語でオウム貝を意味する）」で、天井ガラスにも模られている。
写真	

（2）スタンフォード大学図書館

項目	概要
設立	1885 年
学部	7 つ（地球・エネルギー・環境科学部、工学部、人文科学部、ビジネス学部、教育研究学部、法学部、医学部）

学生数	16,000 人以上
所蔵点数	200 万以上
図書館	20 館以上
訪問先	中央図書館（Cecil H. Green Library）、東アジア図書館（the East Asia Library）
概要・特徴など	・シリコンバレーの発祥地とも呼ばれるスタンフォード大学は、グーグル、ヤフー、ナイキなどを創業した名だたる起業家を生み出した名門私立大学。 ・最も大きな図書館が、中央図書館（Cecil H. Green Library）で、グループ学習スペースをはじめとして、メディア＆マイクロテキストセンターや、映像・ゲームコレクション、レファレンスデスクがある ・東アジア図書館（the East Asia Library）は、中国語、日本語、韓国語の資料が 78 万点以上所蔵されている。
写真	＜中央図書館（Cecil H. Green Library）＞ ＜東アジア図書館（the East Asia Library）＞

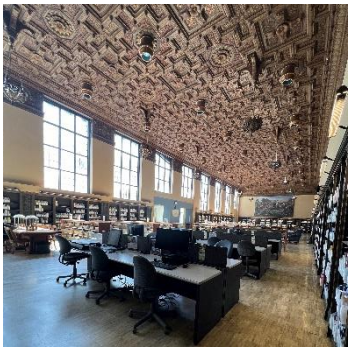
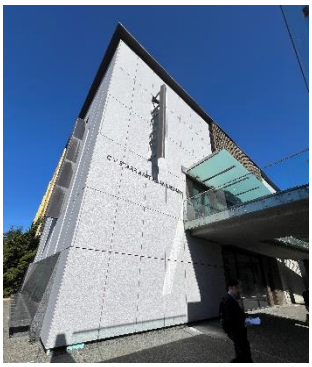
(3) アザートン公共図書館

項目	概要
設立	2002 年
利用者数/貸出冊数（年間）	10 万人利用/10 万冊貸出
概要・特徴など	・全米で 1 番の富裕層が住むといわれるアザートンに建ち、サンフランシスコ市には 13 ヶ所の中で、1 番新しい図書館であり、一帯の施設をまとめて設計され、警察署、市役所なども施設内に建っている。 ・デジタル時代において、図書館という枠を超えて、学校や職場以外の 3 つ目のコミュニティ施設となることを目指し地域社会とのつながりや会話を促進することをコンセプトとして 2022 年に設立され、2023 年に ALA と AIA（アメリカ建築協会）が共同で主催する「図書館建築賞」を受賞した。 ・館内は、サスティナブルでフレキシブルな作りとなっており、天窓から自然光を取り入れ、天井に扇風機、床からは自然な風が入ってくる装置を取り付けていることで、使用エネルギーを半分に減らしている。15 分もあれば空調の配線ごと自由に場所を変更できる仕様となっている。また、本棚・家具全てにキャスターがついており、目的や用途にあわせて自由に簡単に動かせる。
写真	＜外観＞ https://www.wrnsstudio.com/project/atherton-library-and-town-center/ より引用

＜内装＞

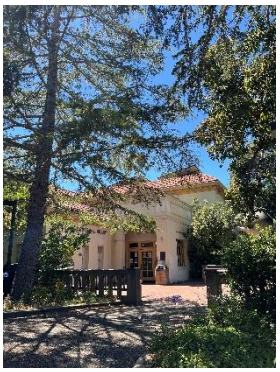
(4) カリフォルニア大学バークレー校

項目	概要
設立	1869 年
学生数	45,699 人
図書館	20 館以上
所蔵点数	1390 万点ほど
訪問先	ドー図書館、モリソン図書館、モフィット図書館、中央書庫、C・V・スター東アジア図書館
概要・特徴	・カリフォルニア大学はカリフォルニア州立の 10 大学の総称で、中でもカリフォルニア大学バークレー校は、Apple 社の共同創業者スティーブ・ウォズニアック、ソフトバンクグループの孫正義、100 名以上のノーベル賞受賞者を輩出し、幅広い先端的な研究と教育で州立大学ナンバーワンと称されている。 ・2023 年 6 月末時点で、北米東アジア図書館の中で 2 番目の蔵書数で、日本語資料が 447,900 点ある。 ・2020 年からデジタルコレクションのポータルサイト「https://www.lib.berkeley.edu/find/digital-collections（2024 年 7 月 29 日最終閲覧）」も公開されており、ブラウザ検索できる。 ・最も大きな図書館が、ドー図書館（Doe Library）で、芸術、人文科学、社会科学、国際・地域研究など、50 以上の学科やプログラムに関連する教育、研究、指導を支援している。ドー図書館内には、モリソン図書館（Morrison Library）があり、ドー図書館の隣にモフィット図書館（Moffit Library）がある。これらの図書館から、230 万冊を所蔵している中央書庫（Main Gardner Stacks）にアクセスできるようになっている。

写真	＜ドー図書館＞  ＜C・V・スター東アジア図書館＞ 

（5）サウサリート公共図書館

項目	概要
設立	1887 年（何度か移転や改装を重ね、2013 年にリニューアル）
概要・特徴など	・MARINet というマリン郡の 7 つの公共図書館と 2 つの学術図書館によるコンソーシアムに参画しており、各加盟館の図書カードで目録、蔵書、一部のデジタル資料について、館の枠を超えて利用できる。 ・館内を説明してくれた図書館員の方が館内の選書、発注、展示全て行っており、地元のアーティストや作家の作品を展示したり、一般的な公共図書館には置いてないニッチな分野の雑誌や、中古で買い揃えた古い本が置かれていたり、2 階ティーン向けエリアでは 1 階からあえて死角になるような環境にしたり、小さな図書館ではあったが創意工夫されており、とても居心地の良い図書館であった。

写真	

（6）ALA 年次総会および ALA 年次総会特別セッション

項目	概要
設立	1876 年
会員数	48,000 人程
概要・特徴	・ALA（アメリカ図書館協会）は世界でも最古かつ最大級の図書館協会である。 ・毎年 6 月に年次総会が開催され、利用者サービスから著作権問題、図書館運営まで、多様なテーマを扱うフォーラム・セッションや、多数の企業が出展する大規模な展示会が開催される。図書館関係者が世界中から集まり、プログラム、カンファレンス、フォーラム・セッション（追加料金有）、展示会等が開催されている。 ・今回展示会見学と、ツアー参加者向けにアレンジメントいただいた特別セッションに参加した。特別セッションで ALA の方から現在の全米での図書館業界全体の動きとして、「禁書・閲覧」が非常に話題となっていることについてお話しを伺った。特定の分野によっては、異議等が寄せられ、抗議活動に発展し、対応に苦慮されていることも紹介されていた。ALA としては、人々が自由に本を読む権利を尊重し、図書館として幅広い分野の本を取り揃え、提供する意義があると考えられることが伝わってき

	た。また、ALA では図書館業界のトレンドをいち早く抑え、抗議活動に対しての公式な声明文の交付、ヘルプラインの策定、法律等の専門知識を学ぶためのコンテンツの提供や、学習者とトレーナー間のオンラインコミュニティの作成など、図書館や司書向けに必要となる支援が整えられていた。
写真	

V.　研修報告

主に上記「Ⅲ．研修目的・課題」に対する内容を中心に報告する。

(1) 米国での図書館スタッフにおいては、専門職として採用していることから、既に個々のスキルがある程度身についており、全体での研修などはあまり実施されておらず、力量形成などは個人に委ねられているケースが多いようである。その中でも研修先の中では、サンディエゴ公共図書館が特に力を入れて人材育成を行っていると感じた。市のコミュニティや他の図書館とも連携して教育を行っており、大学等とも共同して実施されている。また、スタッフ向けの研修用のウェブサイトがあり、上司と相談して、オンラインでの研修受講、個別の研修費用の支援も行われていた。

ALA 年次総会の展示会でサンディエゴ公共図書館の館長から、館内にティーンエリアを設けており、そこではティーン専用のライブラリースタッフも置くなど図書館としても注力していると話を伺った。このティーン専用の図書館員は、特に専門的な知識やスキルを持った者を採用している訳ではなく、採用後に、思春期や流行などについての研修を通じて、ティーンへの接し方を学んでいる。このように、専門職として採用していない場合は、スキルや専門性を磨くためにそれに特化した研修を行っていることもあると分かった。

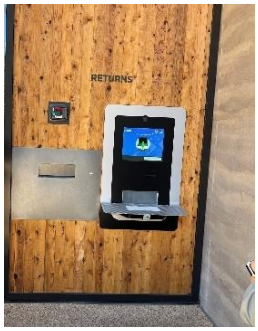
また、ALA としても e ラーニングをウェブサイト上「https://elearning.ala.org/（最終閲覧日：2024 年 7 月 29 日)」で提供しており、有料、無料様々なプログラムがある。

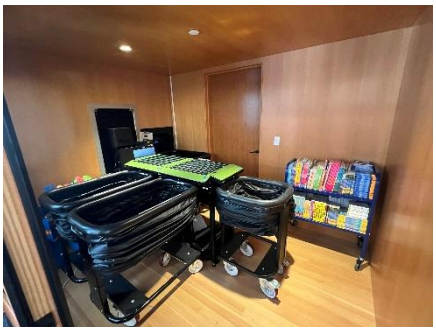
なお、他機関との連携に関しては、公共図書館であれば市との連携がなされており、図書館自体がそもそも図書館という枠を超えてコミュニティ施設として運営されていた。

(2) 特段目新しい ICT 技術を活用し、利用者と新しいコミュニケーションが志向されている図書館は見受けられ無かった。また、AI についても訪問先の全図書館および ALA に

おいて調査を行ったが、個人情報や返答する内容の正確性などについてのテスト段階で、現段階では未導入かつ検討段階に留まっていた。

アザートン図書館では、利用者の利便性を高める目的で、図書館に入館することなく、本の返却ができるようにエントランス外に「自動返却機」が導入されていた。導入費用はかなり高額ではあるが、導入することで図書館に入館することなく、大学のキャンパス内外問わず、本を返却することができるようになり、利用者の本の貸出数の増加の一助にはなると考える。





(3) サービス事例をいくつか調査することができた。

アザートン図書館では、「学ぶためのコレクション」を設置しており、テーマごとに鞄を用意し、備品キットを作り、貸し出しを行っている。例えば、「エネルギーキット」では、水の計測装置や水の使用量を少なくするシャワーヘッドなどが入っており、本以外にも備品を図書館で買い揃えて、貸し出しされていた。

また、訪問した図書館の多くは、図書館内に「モノづくり施設」が設置されていた。近年日本の公共図書館や大学図書館においても、図書館内に設置されている所が増えてきた。「モノづくり施設」と連携して、何か企画やイベントの実施を検討していくことも必要となるのではないか。このようなサービスや取り組みを行うことで、現在の図書館利用者に対して、新たな角度から探究心を育むものを提供でき、新たな図書館利用者の拡大へも繋がるのではないかと考える。

アザートン公共図書館内

「学ぶためのコレクション」

サンフランシスコ公共図書館
ティーンエリア内

アザートン図書館

カリフォルニア大学バークレー校
ドー図書館内

展示コーナーには、展示コーナーがある図書館内の貴重書架の資料、図書館内の会議室で行われた授業や、特別授業に関わる展示がなされていた。大学図書館内で実施されていた特別展では、寄付と併せて寄付者からの要望に応じた展示やイベントを実施していることが基本となっており、貴重書を管理する図書館員や、学芸員が担当し、月に1度のスケジュールで企画されていた。アメリカの寄付文化を背景に、潤沢な資金が集まることで、一時的な人材雇用も可能となり、特にカリフォルニア大学バークレー校の特別展示は、博物館や美術館等並みの高いクオリティーのものであった。

スタンフォード大学の東アジア図書館内
「宗教と漫画の関わり」がテーマの
講義内で作成した展示

カリフォルニア大学バークレー校
外部ファンディングで実施された特別展

また、公共図書館では、訪問する際に何度も「フレンズ」というワードを聞いた。これはいわゆる日本語で「図書館友の会」という図書館の支援を目的に設立されたボランティア組織である。アメリカの公共図書館は、コミュニティの文化の拠点として地域住民と密接に関わりあいながら発展してきた歴史もあり、こういった「図書館友の会」の会員らの協力のもと、イベントや企画実施が行われていることがほとんどであった。地域の利用者が、地域の図書館に積極的に関わることは、地域の人々と一緒に発展でき、即座に必要な情報や要望を汲み込める仕組みであり、合理的だと感じた。

アメリカの図書館のように、図書館に協力したいと賛同してくれる人たちとの関わりの中で、利用者の要望を即座に取り入れて、試行的にでも新しいことに挑戦する仕組みづくりを検討していく必要があると考える。

また、ALA では、コミュニティ向けのプログラムオフィス設け、地域のコミュニティとの繋がりを意識している。Web 上にプログラミングライブラリアン「https://programminglibrarian.org/（最終閲覧日：2024 年 7 月 29 日）」ページを設けている。プログラムの種類、図書館の種類から検索できる。日本でも公共図書館、大学図書館などの他の図書館のイベントや企画の事例がウェブサイトでまとめて閲覧できるようになれば、全ての図書館にとってメリットがあると考える。

サンフランシスコ公共図書館
エントランス外でのイベント

サンフランシスコ公共図書館「図書館友の会本屋」

(4) 本研修の同行メンバーとは、人数も少なかったこともあり、一人ひとりの普段の業務のことについても詳しく意見交換を行うことができ、日本国内の他大学の図書館の状況なども知り得ることができた。また、今回の訪問先であるアメリカの図書館司書の方々とも名刺交換を行いネットワークの構築もできた。まだまだ学ぶべきところが多くあり、この縁に感謝して、今後も継続して図書館に関わる方々との繋がりを大切にしていきたい。

VI. 謝辞

この度、高等教育および図書館においても世界をリードするアメリカでの研修機会を与えてくださった企画運営の丸善雄松堂株式会社、図書館総合展運営委員会、IWA ツアーの皆さまにこの場をお借りして御礼申し上げる。また、この研修者募集の機会を与えてくださった私立大学図書館協会国際図書館協力委員会の皆様に感謝の意を述べる。

VII. 参考文献・資料　※全 URL・データベースへのアクセスは 2024 年 7月29日最終閲覧。

(1) ツアー概要：https://yushodo.maruzen.co.jp/wpcontent/uploads/2024/02/ALA_MY_20240626.pdf
(2)『ALA・米国図書館研修 2024 図書館研修会 2024　事前説明会』丸善雄松堂株式会社図書館総合展運営委員会提供資料
(3) サンフランシスコ公共図書館　ウェブサイト：https://sfpl.org/
(4) スタンフォード大学図書館　ウェブサイト：https://library.stanford.edu/
(5) カリフォルニア大学バークレー校図書館
ウェブサイト：https://www.lib.berkeley.edu/
(6) WRNS Studio『Atherton Library and Town Center』ウェブサイト：https://www.wrnsstudio.com/project/atherton-library-and-town-center/
(7) Atherton Library　ウェブサイト：https://www.ci.atherton.ca.us/268/Library
(8) MARINet：https://marinet.lib.ca.us/screens/help_marinet.html
(9) サンディエゴ公共図書館　ティーンエリアページ
ウェブサイト：https://www.sdcl.org/teens/
(10)『American Libraries and ALA』 ALA 提供資料
(11) 2024 ALA Annual Conference & Exhibition
ウェブサイト：https://2024.alaannual.org/

以上